

## 4. 教育実習レポート

### 教育実習を通じて、考えた課題とその解決に向けたビジョン

牧野佑里子

#### I. はじめに

6月2日から20日までの3週間、私は母校である堺市立金岡南中学校にて教育実習に行きました。学校の生徒は比較的落ち着いており、全校集会でもほとんどの生徒がきちんと座って静かに話を聞くことができます。私が担当した1年生は、まだまだ小学校気分が抜けていない生徒が多く、非常にエネルギッシュな印象を受けました。男女共に、休み時間には教室や廊下で走り回り、じゃれ合う場面を多く見かけました。授業では、教科の先生ごとにクラスの雰囲気も少しずつ違い、静かに集中するときもあれば、ワイワイやかましい時もあります。恐らく中学校の環境に少しずつ慣れてきた時期と、暑さが重なってだらだらしたいというような様子が伺える場面もよくありました。

私の担当のクラスは1年2組で、担当教諭である杉原理恵先生の受け持つクラスでした。男子が20名、女子が18名の計38名がクラスの端からまで埋まっている状態で少し窮屈さが感じられました。英語の授業を担当させてもらったのは、1年1組、1年2組、1年3組の3クラスで、2週目からそれぞれ8回ずつ授業をさせてもらったので、合計24回の授業を私が担当したことになります。最初はそれほど多くの授業をきちんとこなせるか不安でしたが、実際に経験を積むうちに必要以上の緊張はしなくなったように思われます。また、生徒たちは全体的に実習生である私に興味を抱いてくれており、初日から学年を問わず声をかけてきてくれる生徒が多く、非常に喜ばしかったことを覚えています。

この3週間の実習経験を通して学んだことや疑問に思ったことなど、もう一度改めて振り返りながら考えてみようと思います。そこで、私は「生徒のために良い授業とは」ということをテーマに掲げ、意見をまとめていきます。

#### II. 授業観察から学んだこと

教育実習1週間目は、担当教諭をはじめに何人かの先生方に許可を頂き、授業を見学・参加させていただきました。教科は英語だけでなく、国語、理科、学級活動にも参加しつつ重要なことを学びました。教科ごとに授業方法も様々で、学校全体でも、プロジェクターを活用して授業をしていらっしゃる先生方が何名もおられたのには驚きました。理科や社会では、画像を投影して生徒たちの興味と理解を深めるために活用されていたと考えられる。英語でプロジェクターを使っていらっしゃる先生は毎回の授業のウォームアップで英語の歌詞を投影し、歌を生徒と一緒に歌っていらっしゃいました。確かにその方法だと、生徒たちは必ず顔を上げて前を見ることで、大きな声が出やすい環境だと思いましたが、投影している歌詞をネイティブの発音に近くなるようなカタカナで全て表記しているのには非常に違和感を覚えました。そこで私は、その歌を歌わせる目的は何なのかを考え、私がその方法でより良い効果が期待できると思われたのは、

- ・これから英語の授業を受けるにあたって、元気よく大きい声を出させるため
- ・カタカナで表記することで、ネイティブの発音に対して感じる抵抗を減らすため
- ・英語の歌を歌えるという自信を持たせるため
- ・少しでも英語に興味を持たせるため

というこれらの利点が考えられます。一方で、欠点については、

- ・カタカナだけを見て歌っているために英語を見ても歌えないこと、つまり他の歌に応用できないこと
- ・英語を発音している意識は生徒にはないため、わざわざ英語の歌にする意味がないのではないかということ
- ・ネイティブの発音に近くなるカタカナを表記していても、そのカタカナが必ずしも正しい訳ではなく、カタカナは結局日本語の発音に過ぎないこと
- ・カタカナを読むことに意識を集中させるため、単にメロディーに合わせるだけで、英語の発音に耳を慣らす訓練にはならないのではないかということ

このように、英語の歌をウォームアップに利用する際にカタカナのみを投影することは、本当に生徒のために良い方法を取るために、もっと改善が必要だと感じられました。その中でも私が一番改善すべきだと思うのは全てカタカナを表示していることで、どうしてもカタカナを表記するのなら、小さい字で英語の歌詞の上に表記すべきだと思われました。

他に授業観察で私が注目したのは声の大きさです。これまで、私が授業を受ける側だった時には一切気にしなかったのですが、主に教室の後ろで毎回観察をさせていただいていると、先生方の声は間違いなく一番後ろの生徒まで届いている上に、あ

の元気な生徒たちの声に負けない大きさ・声の高さを保たれているように思われました。いざ、自分が授業する番になって、気をつけてみたものの、やはり授業後のフィードバックで声の大きさについてご指摘を頂きました。自分では、大きな声を出しているつもりなのにどうしてだろうと何度も考え、毎回の授業で声には必ず意識をしながら取り組みました。そうやって意識をし続けていると、ある日担当教諭から以前より声を通るようになってきたと言っていたいただけるようになり、続けて意識をするように心がけていました。それは、恐らく初めに比べて緊張度が低くなったことや、授業の進行ばかりに気を取られるのではなく、自分自身に少し余裕ができてきたからだと考えられます。3週目に入り、だいぶ生徒たちとも打ち解けるようになり、しっかり名前と顔が一致するようになったところに研究授業がありました。その際に見に来て下さった先生方に授業後、感想を伺いに行ったところ、また声の大きさを指摘されました。ただ、その先生には、ただただ大きい声を出すことだけを考えるのではなく、声を出す向きに気を付けてと良いというアドバイス頂きました。単に大きくするだけでは、喉を傷めてしまうだけなので、声はお腹から出すよう練習すること。声を出す方向は常に教室の一番後ろの子に向けて話すつもりで声を飛ばすと声の通り方はずいぶん違うと教わりました。たとえ後ろの子に向けて話していても、口の前に教科書があると、それだけで声は届きにくくなることや、黒板に板書している最中でも話すときは必ず生徒たちの方を向かないと後ろまで声は届かないことも具体的に教えていただき、次の授業からこれらのことをさらに意識しました。そして、最後の授業が終わり、担当した3クラス約120名にアンケートをとった結果、ほとんどの生徒が問題なく聞こえていたと回答しており、生徒の中には、「最初の頃は声がなかなか聞こえにくかったけど、最後の方にはよく聞こえるようになったのでわかりやすかった。」と意見を詳しく書いてくれた生徒も何名かいたので、素直に嬉しかったことを覚えています。このような壁や苦手なことにぶつかったときに避けて通るのではなく、どのように攻略するのかを自分なりに見つけたり、誰かからヒントを得つつ、実際にそれに気をつけながら取り組むことで、何らかの答えや生徒たちの反応として自分に返ってくるものなのだと思います。自分で授業をすること自体に慣れたり、自信を持って授業をするにはやはり、経験がものを言うとなんと何人もの方にお話を聞きましたし、何度も何度も試行錯誤しながら生徒たちのことを思って授業を作っていくからこそ、自分なりの方法が見つかるものなのだと考えられます。

私たちは大学で様々な授業方法を学んできました。私たちが中学生だった頃とは教科書の内容も少しずつ変わり、単語の量が増え、高校に至っては今やオールイングリッシュで授業をすることが進められてきています。そのため、私が実習に行く前に想像していた中学校の授業は、クラスルームイングリッシュ多く用いてもっと生徒が発言する機会や、英語を話す機会が多くなっているのではないかと考えられました。ところが、実際の中学校の現場では、1年、2年、3年のどの授業を見学しても私たちが中学生だった9年前とそれほど変わることなく、文法訳読式が中心でした。確かに、教科書はNEW CROWNからSunshineに変わり、本文自体、会話体の物が多くなっていましたが、結局生徒たちにとって、英語を理解するために日本語訳は欠かせないものに変わりはなかったように思われます。しかし、本来英語を完璧な日本語で訳すことはできないので、中学校3年生レベルになると、英語を英語で理解する訓練として英英辞書を使うようにするなど、早い段階から「英語で」理解する方法に慣れていく必要があると考えられます。これは、中学だけではなく高校でも積極的に取り入れていくべきであり、今後の英語教育の課題であると思われれます。

#### ・私が中学生だった頃と変わっていたこと

本来は英語でも日本語として使われることが一般化されるようになってきた言葉が増えている日本社会の影響や、教科書が変わった今、中学校の先生方は私が中学生だった頃に比べると、英語の単語発音練習や本文の音読練習の割合が多くなったと考えられます。私たちの頃は、発音するのは1度ずつで、本文の音読も授業内では1～2回した程度だと思われれます。その結果、多くの生徒が、ネイティブに近い発音をすることに対して否定的でした。一方で、現在はおそらく、小学校の時から英語に触れる機会も増えていることもあり、ネイティブに近い発音をすることに対しての嫌悪感や恥ずかしさを感じる生徒はだいぶ少なくなっているように思われました。それは、良い傾向なこと間違いはなく、授業内で先生がもっと英語を取り入れて進めていけば、英語を聞く力はさらにつくと考えられます。

私が担当した1年生では、フォニックスのテキストがあり、実際にフォニックスの授業も何度か受け持ちました。私がフォニックスを知ったのは大学3年のころで、まさか中学校でそのフォニックスが教えられているとは思いませんでした。本当に、フォニックスを一から教えるにはきちんとフォニックスを教える方法を学んだ経験のある人が教えるべきなのだろうと思いますが、そもそも母音と子音の区別もあやふやな状態の生徒に対して詳しくフォニックスを教えるのはかなり難しいように思われました。授業で実際に教えたことは「音読み」と「アルファベット読み」があることやそれぞれに当てはまる単語がどのようなものか、その単語を聞いてアルファベットを答えることができるか、などを含め「サイレント（マジック）e」についても少し教えました。本来なら発音記号を理解し、それと音を結びつけるためのフォニックスだとは思いますが、今の中学生に発音記号を全て理解させて音を覚えることは授業内では不可能だと思われれます。そうすると、今の教え方でフォニックスと呼んで良いのかさえ、危ういと思われれます。しか

し、この方法でも「音読み」と「アルファベット読み」を区別しながら読む練習をするだけでも継続していれば、いつの日か初めて見た単語でも正しい読み方ができるようになっているかもしれません。このフォニックスは先生方も、まだまだ実験段階で、試行錯誤しながら生徒が理解しやすいように心がけながら取り組んでいるようです。いつの日か、今よりもっとグローバルな日本社会になったところに英語圏の子どもたちと同じような段階でフォニックスを教えることができれば、日本の第二言語として英語が定着するのも可能性が無くはないと感じられました。

### Ⅲ. 授業を担当してみて気が付いたこと

私が担当した1年生はとにかく元気で休み時間は大声を出しながら走り回っている生徒が大勢いました。授業時間は、主に50分ですが、週に2回程度は45分授業でした。授業開始のチャイムが鳴ると走って教室に戻ってきて、落ち着いている生徒の方がむしろ少ない状況からのスタートでした。1年生のこの時期はまだ、持ち物チェックを毎回するようにしており、ウォームアップとして歌を歌っている間や、生徒たちが落ち着くまでの間に先に確認して回っていました。時には、前の授業が体育でプールの授業であった場合や、移動教室で教室のカギが行方不明になるというハプニングのせいで、授業を始めるのが5分～10分遅れることはよくありました。授業を担当し始めた最初の頃は、特に進行ばかりに気が散ってしまい、空回りしているのが自分でも分かるくらいだったと思われまます。少しずつ慣れていくと要領が掴めてきたこともあり、その時々に合わせてこのパートを短くしよう、余裕があるからもう少し練習してみようという風に見ながら調節できるようになったのではないかと感じます。

最初の頃は授業内で次に何をするか、配ったプリントをどうするのか、などにあまり気を配れず、生徒はどうすればいいのか細かく指示をした方がいいと改めてご指導いただきました。このぐらいいは分かるだろう、別に言わなくてもいいというような考えでは、ますます授業についていけない生徒が増える一方なので、自分自身の価値観ではなく常に生徒たちの立場になって考えることは非常に重要であると感じました。一番最初の基礎を教えるからこそ、だいたいでではなくきちんと正しい知識を教える責任感を覚えました。プリント一つを作るにしても、板書をするにしても、私が普段書いている英語は自分の癖が出てしまい、「t」を「t」と書いてしまったり、「f」を「f」と書いてしまったことがあります。まだアルファベットを覚えてたの生徒たちは先生の書く文字をそのままの形で書いてしまうので、そういう細かいところまで意識をしなければならぬと改めて感じました。それと同じようにプリントを作る際にも字体には特に気を付けました。また、アルファベットを覚えきれていない生徒もまだいるため、プリントには必ず4線をつけるようにしました。「h」と「n」の区別や「r」と「n」、「v」など「b」と「d」を間違えて書いてしまうこともあり、それぞれの文字があやふやになってはいないか、チェックするためにも、プリントをしている最中には机間支援に入りアドバイスを伝えるようにしました。それでも全員をチェックできないので、時にはプリントを回収し、全てチェックしたところ、生徒たちはどのようなところで間違えて、どの文字を書くのが苦手であるのかよく知ることができる良い機会だということ学びました。生徒たちは、その返却されたプリントにコメントや、スタンプ、シールが貼ってあるのを見るだけで喜ぶので、非常に素直な印象も受けました。

また、私たちが中学生だった頃は3年間「New Crown」でしたが、金岡南中学校で教材が「Sunshine」に変わったのは今の中学3年生が中学1年生だった年でした。当時の教科書とは異なり、習う文法や単語の順番が違和感を感じるが多かったように思われます。私が担当したのはPROGRAM4でPart1で「What do you ~?」Part2で「複数形」Part3が「How many ~?」が取り上げられていましたが、まだ「That」、「This」、「It」、「she」、「he」など他にも重要な概念を習っておらず、実際に本文に出てくるのはまだ少し先のことでした。授業内でアクティビティをするにしても、習っていることが限られるためにゲームを考案することが大変だと担当教諭もおっしゃっていました。私が担当したときには「What do you ~?」の導入として「What's this?」を使いました。生徒たちはまだ「What」を習ったことがなく、いきなり本文で「What do you ~?」に入るのは難しいと感じたためです。実際、本文で「What do you ~?」を説明したときには前回に「What」の意味や概念を説明し、何度も例文を使うなど練習したことにより生徒の反応も良かったように思われます。このように、生徒たちが理解しやすいよう、教科書通りに従って本文に出てくるより以前に教えるべきだと判断した文法やその語彙の概念、使い方などを生徒の負担にならない程度に教えることは重要だと考えられます。

### Ⅳ. まとめ

中学校での教育実習を経験し、「生徒のために良い授業とは」というテーマで考察を進めた結果、重要なポイントは、

1. 常に生徒の英語に対する興味を引き付ける方法を取り入れた授業であること
2. クラスの規模に関わらず全員に聞こえやすい声の大ききで授業をすすめること
3. 英語を聞いたり英語で理解したりできるよう、教師は積極的に英語を活用して英語そのものに慣れさせる努力をすること
4. 教師は的確な指示を与え、生徒がそれぞれ学びに集中できるようクラス全体を配慮し、環境づくりをするこ

5. 教師自身の悪い癖や思い込みを取り除き、常に新鮮な目線で正確かつ適切な知識を与えられる授業であること

6. 常に生徒の立場から理解しやすい方法を考え構成された授業であること

以上の6点が、私が教育実習を経て考えだした良い授業の要素である。これらを前提に、教師は日々変わりゆく状況に対応しながら生徒たちと共に成長し続けなければならないと思われる。

## 教育実習を通じて、考えた課題とその解決に向けたビジョン

大杉 日登美

### I. はじめに

平成26年6月2日～20日、私は母校である和泉市立石尾中学校にて教育実習を行なった。担当学年は中学2年生で、英語科の授業を担当したのは2クラス、ホームルームクラスは1クラス（前者とは別のクラス）であった。このレポートでは授業担当をした2クラスに焦点を当て、実習後に感じた英語指導上の良い点・悪い点等を項目ごとに説明していきたい。

### II. 英語指導上のシステムと生徒の英語レベル

まず初めに、この学校の英語指導上のシステムと生徒の英語レベルを紹介する。

□当該学年の英語指導上のシステム

- ①集中力に欠ける生徒が多いため、授業は基本的に日本語で行う。
- ②授業に入る前に必ず“今日のテーマ”として授業内容を紹介する。
- ③平常点として持ち物・服装チェックを毎回行う。
- ④教科書の読解は日本語訳読式で行い、日本語訳は穴埋めプリントを使用する。
- ⑤板書は全て手書きで行う。（貼り付けたものは生徒に圧迫感を与えるため。）
- ⑥教科書の見開き2ページを3時間かけて授業を行う。（①本文、単語②文法③ポイント、日本語訳）
- ⑦ALTは使用しない。

□当該生徒の英語レベル

- ①英語が得意な生徒と、そうでない生徒のギャップが大きい。（できる生徒の多くは塾に通っている。）
- ②英作文の経験がないため、ワークシート等もほとんどしたことがない。
- ③テストでは、意図的に間違いを解答する学生が何名かいる。

### III. 英語指導上の良い点、またその効果

授業見学や自分が行なった授業を振り返り、英語指導上の良い点、またその効果を述べていきたい。

#### ・テーマ紹介

まず、毎回の授業初めに今日のテーマを必ず紹介する、ということだ。チャイムが鳴って急に授業に入るのではなく、今日行うことを知ることで生徒へ安心感を与えると思われる。特に当該生徒の多くは英語を苦手としているため、途中で集中力が切れてしまっても何をやっているかを理解していると途中参加がしやすいため、効果があると考えた。私は自分の行う授業では、このテーマの紹介に一つ工夫を凝らした。担当教官は今日のテーマを①～②～③～…と数字で紹介していたが、私はto doリストのように□～□～□～…とし、終わったものにはチェック（☑）をつけていったのだ。理由は、目で見て今何を行なっているのか、次は何を行うのか、と確認できるためである。ある生徒からは「チェックを付けていくのを見るのが楽しい。」という言葉ももらった。チェックをつけることで、今行なっている授業内容を理解できるという安心感だけでなく、一つのアクティビティが終了したという達成感も与えることができるのだ。

#### ・ウォーミングアップ

次にウォーミングアップを行い、英語の授業に入る態勢を整えるということだ。私は毎回ウォーミングアップとして今日のニュース（授業内容と関連性のあるものや授業に入りやすいもの）を、時には写真を見せながら紹介した。授業見学の際、始業の挨拶をした後も私語を止めない生徒や、英語科とは全く関係のないことをしている生徒が目立っていたためである。身近なニュースを扱い、生徒とコミュニケーションを取りつつ、授業に入るようにすることで、それらを阻止しようと私は考えた。“英語の授業”となると苦手な生徒は引け目を感じてしまうケースが多いが、“ニュース（例えば、サッカーW杯）”となると苦手な生徒でも“知っている”から聞こう、質問に答えようという気になるのだ。実際の授業では、ほとんどの生徒が積極的に発言しようとしており、また毎回違

うニュースを紹介することで彼らの興味付けにも繋がったように思われる。授業の運営側にとっても、授業前に英語の授業に入る態勢ができていれば、その後のアクティビティが行いやすい。また、英語科とは違うことを行う生徒に対して注意をする量も減らすことができる。クラスの雰囲気の良い状態に保ち、なおかつ、授業への導入をスムーズに行うためにウォーミングアップは必須である。

#### ・使用する言葉や話し方

続いて、授業で教師が使用する言葉についてである。学年のシステムでは日本語で授業を行うよう設定されているが、文部科学省（2013）がグローバル化に対応した新たな英語教育の在り方として「授業を英語で行うことを基本とする」と掲げているように、クラスルームイングリッシュ等を徐々に増やしていく必要があると思う。当該学年では4技能のうち、本文の音読やノートテイキングにより“読む”“書く”には力を入れているが、“聞く”“話す”においては指導が甘い。そのため、慣れるまでは英語の後に日本語説明を行う等から少しずつ英語を“聞く”という機会を増やしていくべきだと思う。私は初めての授業の際、英語で自己紹介（その後に日本語）を行なった。クラス全員が聞き慣れない英語に耳を傾けている様子で、中には「かっこいい。」という声も上がった。英語を積極的に教師が使用することは、生徒の英語に対する、また授業への興味付けの効果があると思われる。さらに、授業内で使用する日本語での話し方において、授業見学を通して感じたことがある。それは生徒に対して丁寧語を使用するのか、普段の話し言葉を使用するのか、ということである。教科の違いもあるだろうが、コミュニケーションを重視する教科は話し言葉の方が生徒達も授業参加がしやすいように思われた。ある先生は「～なさい。」ではなく「～しようか。」という言葉で生徒達に声かけをしていた。親しみやすく、優しい言葉は生徒の耳に入りやすいようで、進んで行動に移しているように思えた。

#### ・モチベーションアップ

“褒める”ということが指導上で大切なキーである。どんなに簡単な問題であっても、正解をした時や発言をした時には必ず生徒を褒めてあげることが彼らのモチベーションアップに繋がる。40人の前で自分の答えや考えを発表するのは、“間違ったらどうしよう”という不安や緊張もあるだろう。そこで、先生に「いいですね。」「素晴らしいね。」と評価をされると、彼らは嬉しいだけではなく、自分の発言に自信を持つようになるのだ。ここで“嬉しい”という感情が学ぶ姿勢に結びついていくと考えられる。モチベーションの上げ方は教師が発する言葉だけではなく、様々な方法がある。例えば1年生の英語科授業見学で、生徒が活き活きしていると感じた指導法がある。それは一分間で本文を何度読めるかを、それぞれの生徒が個人で読んだ回数を数えるという指導法である。タイムを測ることで競争心が生まれ、彼らのモチベーションアップに繋がっていると感じた。このようなゲーム感覚で楽しみながら身につく学習というのが、生徒達にとって良い指導法であると私は考える。

私はフラッシュカードでのテンポアップ練習を行なった。フラッシュカードを使用して、単語の発音練習や意味確認を行なった後の復習では、徐々にスピードを速めて練習をした。生徒達は目をキラキラさせ、私がカードをめくるテンポに必死についている様子であった。また、何度もカード練習を行うので楽しいだけではなく、記憶の定着も図れるのだ。前述で当該学年のシステムは“話す”、“聞く”への指導が甘いと説明したが、このカード練習で“英語を自分の声で発音する”、“友人の英語を耳で聞き取る”ことができるのだ。

最後に生徒のモチベーションアップとして、できる生徒を“お助けマン”にする方法がある。大半が英語を苦手としているが、中には英語が得意な生徒がいる。しかし、そのような生徒は2パターンに分けられる。1つめは、自分の持っている知識を堂々とクラスの前で発言するタイプ。そしてもう一方は、わかっているけど何も言わない、または小さな声で発言するタイプである。40人という大人数で、レベルも様々な生徒と一緒に同じ授業を受けているのだ。どのレベルに合わせて教師は授業をすべきだろうか。苦手な生徒ばかりに合わせていては、得意な生徒が伸びない、または退屈をする授業である。逆に、得意な生徒に合わせて、苦手な生徒はついていけなくなり、英語嫌いを増やしてしまう危険性がある。そこで私は、授業見学の際にクラスの生徒達のレベルをある程度確認し、小テストでよくできる生徒を自分が持っている名簿にチェックを入れた。そして自分が教卓に立つと、このチェックを入れた生徒には共通点があった。それは私がクラスに対して質問を促した際に、今でも当ててほしいような眼差しである（パターン1の生徒は当てる前に答えているケースもよくある）。しかし質問を促し、個人指名をする場合、あえて苦手な生徒を数名当てるのだ。不正解であった場合、最後のトリとしてチェックした彼らに「お助けマン〇〇さん、お願いします。」という風に、スポットライトを当てる。そうすることで彼らに満足感を与えることができ、先生は自分を頼りにしているという気分にもさせるため、学習意欲アップにも繋がる。また他の生徒も“お助けマン”に対する憧れを自然と抱くだろう。さらにお助けマンが真剣に授業に参加することでクラスの雰囲気は良いものになる。周りも影響され、聞く姿勢ややる気が出るのだ。このように生徒の感情を揺さぶらせ、モチベーションアップを図ることはクラス全体の空気を良くする働きがある。

#### 4. 英語指導上の悪い点、またその課題

次に英語指導上の悪い点、またその課題について考えていきたい。

##### ・テキストの使用法

まず、授業の基本となるテキストについてである。当該学年ではリーディングページの音読や読解が中心となっており、ライティングやスピーキングページを一切使用していない。また、アクティビティも行ったことがない。英作文の練習や対話練習の機会が設けられてあるにも関わらず、それらのページは未使用なのである。集中力に欠け、英語を苦手とする多くの生徒はアクティビティを真面目に行わないという判断から、このような策を講じているのであろう。しかし、これは生徒達にとって良い指導法であろうか。ただ席に座り、教師の後に続いて英語を読み、黒板に書かれた文字をノートに写すことができれば、英語は身につくのであろうか。これからの課題は、英語ができない生徒が授業の足を引っ張るのではないかと、真面目に取り組んでくれないのではないだろうか、という考えは捨てるべきである。そのような生徒の苦手を“好き”に変えるよう、教師はアクティビティの機会を有効に活用し、彼らが興味を持って取り組めるような活動をするべきである。“楽しい、おもしろい”という体験や感情は記憶に残るだけではなく、これからの英語を学ぶ姿勢にも影響は多いと考えられる。テキストの在る意味を再認識し、指導内容を見直すべきである。

##### ・英語の発音指導

続いて、発音指導についてである。日本人教師の発音の悪さはよく取り上げられているトピックであるが、今回は教育実習での発音指導に着目したいと思う。当該学年では新出単語を紹介する際に、先生は黒板を使用し、カタカナで発音方法を指導する。英語の発音は日本人が普段話すカタカナ読みでは表記しにくいものが多いのにも関わらず、全ての英単語をカタカナで紹介するのは、endにはエンドウ、listにはリストウと書かれており、生徒は先生の唇や舌の動きを確認するのではなく、ただひたすら板書のカタカナを眺めている。発音記号を学習していない中学生にとって、慣れない英語の発音は聞き取りにくく、習得しにくいものであろう。しかし、教師は中途半端なカタカナ読みを教えるのではなく、自分の発音に自信を持ち、唇や舌の動き、口の開け方等の説明を行う方がより生徒達にとって効果があるのではないだろうか。文部科学省がグローバルな視野を持った教育改革を図っているが、これでは日本人によるカタカナ英語の指導である。これからの課題としてはまず教師が英語を英語として、自分の発音に自信を持って指導することである。CDを使用した発音練習でも良いだろう。協調する部分はどこであるか、口はどのような動きをするのか、板書するのはカタカナではなく、他に大切なことがある。

##### ・ワンパターンのワークシート

次にワークシートについてである。上記の説明であったように、当該学年はテキストのリーディングページの読解が主で、アクティビティを行わない。そこで私はワークシートを授業で用いることで英作文の練習を試みた。内容は新しく学習した文法を復習するためのワークシートである。A3サイズのシートの左側には例を挙げて文法の説明、右側には穴埋め式の復習問題を全7問作成した。4問目まではヒントとして単語が埋められているものや、頭文字のみが書かれているものもある。8分間程度あれば終わると予測したワークシートであったが、英作文の経験がない生徒にとっては非常に難しいものであったようだ。原因はこのワンパターンのシートである。穴埋めだけでなく、並べ替えであったり、疑問文への変換であったりと、動きのあるワークシートでなければ生徒達は退屈してしまうのである。簡単な問題から徐々にレベルを上げていくことで、生徒のモチベーションアップにも繋がるはずである。また、今回は個人ワークとしてこのシートを配布したが、アクティビティ経験のない当該生徒にとっては不安を抱かせてしまった可能性も考えられる。ワークシートに拒否反応を出し、手をつけようとすらしらない生徒も多くいたため、一緒に声に出しながら確認していくアクティビティから始めるのも良い方法ではないかと感じた。

##### ・教師の理解と生徒の実態

最後は教師の理解と生徒の実態である。というのも、自分自身が思い込んだ中学2年生の英語レベルと、実際の生徒のレベルには大きなギャップがあったためである。前述にあったワークシートの件においても言えることだが、自分の感覚で“これくらいのレベルだったらわかるだろう”“これくらいの時間を与えると解けるだろう”という思い込みが、生徒にとって困難を招く原因になるということを思い知らされた。また、予想もしなかった質問が飛んできたり、突然英語とは全く関係のないことをし始める生徒もいるため、思い込みでは授業は上手く運営できないと気づかされた。1年生で学習した範囲を完璧に理解している生徒もいるが、中には単数と複数の違いや三人称のsの意味を未だにわかっていない生徒も多にいる。“もう中学2年生なんだから…”という教師の主観的な考え方ではなく、授業においてもワークシート作りにおいても、生徒の立場から授業展開、問題作りをしなければならない。生徒の実態をしっかり理解し、彼らに合った英語指導を行わなければならないのだ。

さらに、クラスによっても生徒の実態は異なる。“同じ中学校で、同じ学年だから…”は通用しないのだ。実際に私は2クラスを担当し、同範囲を教えるつもりであったが、スタートは一緒でも全く同じ授業を行うことが不可能であった。クラスの雰囲気や違い、理解度も違うということを目の当たりにした。フラッシュカード一枚でさえも、めくるスピードをクラスに合わせなければ、全員が揃っ

て練習に取り組むことは難しいのである。これからの課題としては、生徒やクラスの観察を行い、それぞれに合わせた授業展開である。

## 5. おわりに

多くの生徒にとって“わかる”授業とは、どのような授業だろうか。アクティビティばかりの授業だろうか、それとも自分達のレベルにぴったり合わせられた授業であろうか。正解は一人ひとりの生徒にある。教師の指導と生徒の習熟度はリンクしているのだ。“楽しい”授業で学んだ知識や記憶は、生徒の“知っている”を作る。この感情が彼らに自信を与え、集中力、また英語の授業に対するモチベーションをアップさせるのである。

教室は生きているのだ。その日のクラスの雰囲気であったり、生徒達の様子や状況に同じものはない。教師はいかにしてその情報を素早くキャッチし、授業を運営することができるかが大切である。時には作成した指導案とは別の活動や指導を取り入れなければならないケースも生じるであろう。どんな状況においても、笑顔を決やさず、生徒と真面目に向き合う教師こそが今、求められている人材ではないだろうか。生徒だけではなく、教師にとっても日々の学習が重要である。教師の指導法が、生徒の今後に大きく影響する。

## 参考文献

- ・ 文部科学省 (2013) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/\\_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf)

## 能動的学習（アクティブ・ラーニング）の実際

### － 3 週間の教育実習を通して－

山本 妙

## 1. はじめに

### 1. 中学校における外国語活動の位置づけと実際の教育現場

現在、外国語活動の目標として「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを測ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーションの能力を養う。」と中学校学習指導要領に明記され、平成 24 年 4 月から、教師も生徒も英語をできるだけ使う英語教育が中学校に導入されている（2008、文部科学省）。よって、教師は生徒に“英語を使わせる”という積極性を備えさせることが必要とされている。その目標に適した指導法の 1 つとして、コミュニケーションを積極的に行わせることを目的とした能動的学習（アクティブ・ラーニング）に狙いを定めたい。文部科学省はこの能動的学習、アクティブ・ラーニングについて次のように定義している。

“教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。”

また、中央教育審議会の報告書では、能動的学習の必要性について次のように述べられている。

“生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。”

したがって、生徒が英語を自ら使う積極性・意欲を作るため、現代の英語教育の成功にこの学習方法は大きな鍵を握っていると感じる。しかし、中学生は思春期の真ただ中であり、発言することを恥ずかしがる生徒がいる。また、教師の指示に従わない、授業中に立ち歩く、そして授業を放棄するなど自由奔放な生徒もいる。問題行動を起こす生徒がいれば、もちろん生徒指導を行わなければならない。実際、現場の教師は授業の準備や教科の業務より、生徒指導につきっきりになり、一日が終わってしまうこともある。そんな個性様々な生徒がいる中学校で、この学習方法を成功するためには何をすれば良いだろうか。私が教育実習期間、生徒と関わった中での体験談や交えながら、発見した課題と効果的方法を論述し、これについて考えたい。

## II. 能動的学習のための効果的指導法の実際

### 1. 他者を巻き込み責任感を与えるアクティビティ

初めの1週間は各クラスの雰囲気や生徒の性格・特徴、また授業の流れや形式を把握するため、授業を見学させていただいた。そこで何人かの生徒の行動に衝撃を受けた。受け取ったプリントをすぐ机の中に押し込む、立ち歩く、また教師の目を盗み、机の下でこっそりと読書をしている、など授業を放置している生徒が何人かいたのである。実際、全ての生徒を理解させるために、常に統一された完璧なクラスマネジメントを行い、それを維持することは非常に難しい。どのようにすれば、これらの行動を起こす生徒達は授業に関わってくれるのだろうか。1週間授業見学を終えて、私の第一の目標は授業に全員参加させることであった。そう考えた時に、思いついた案として他者を巻き込むアクティビティである。

例えば、教科用図書（以下、教科書と記す。）の内容の指導に必要な不可欠な音読活動では、個人ではなくペアやグループ活動を取り入れる。個人で読むことを行うと、自己責任になるため、英語嫌いの生徒や寝ている生徒は参加せず、音読を行っている数十秒～1分程度の間にはクラスの生徒が全員きちんと読んでいるかなど机間巡視しながら確認することは不可能に近い。しかし、音読をペアにし、交互にすることで、生徒達に責任感が生まれるのである。他者が読んでいるところをきちんとリスニングしていなければ、自分の読む箇所がわからなくなる。また自分がちゃんと読まなければ、他者に次の箇所を引き継ぐことができない。相手に迷惑をかけてはいけないという責任感を自然に作ることで、自分のやるべきことをしっかりさせることができる。もちろん、個人で音読する方が本文理解に適している題材もある。その点を踏まえ、題材研究を重ねた上でペアリーディングを行いたい。もう一つ能動的学習の効果的なアクティビティとして、ペアで行うパフォーマンス活動を挙げることができる。最適な教材としてピーキングの強化を図る題材が下られる。私は would を使った丁寧な表現を習得する、という単元を担当させていただいた。教科書 NEW HORIZON 3 Speaking Plus 1 でのモデル場面は Would you like to come with me? と、映画への誘いが設定されている。ここで生徒達にペアを組ませ、会話を書き込むワークシートを完成させた。活動に取り掛かる前に、後で何組か指名し全体発表させるということも伝達しておく。発表する、と先に伝えておくことで、生徒達はもしかしたら発表するかもしれない、と真剣に取り掛かるのである。また、発表時にじゃんけんさせ、役割を決めることでペアの両者ともに誘う側、そして誘われる側の両方の表現を練習させることができる。そして発表者以外も活動に参加させるために、ワークシートに設けた聞き取り欄を記入し、後に回収することを指示する。そうすることで発表者は大きな声で自ら発声し、発表者以外は耳を傾けてリスニングし書き取りする。やや強制的ではあり、ペアのレベルが違いすぎると片方に作業が偏ってしまう、というデメリットもある。だが、自ら参加しなければならぬという責任感を持たせるアクティビティを取り入れることで、生徒たちは学習に関わる。ワークシートを使ったパフォーマンスが練習だったとしても、生徒たちは自ら英文を考え、何度も発声し、積極的に英語を多用していくきっかけになるのである。

### 2. 段階的アプローチを踏まえ、生徒の意見・考えを問うこと

英語科の教科書は教科の指導にとって欠かせないものである。たくさん単語が教科書に記載されている。それらは3年間で1200語程度の単語習得という中学校学習指導要領で決められたルールを順守のため、という理由もちろん、正しい発音の定着という役割も持っている。しかし、実際英語で表現する時は教科書の内容で設定された場面とは限らない。英語で表現する場合、中学校学習指導要領の言語活動における学習段階を考慮した指導上の配慮事項に記載されているように、自分の考えや意見を表すことが求められる。しかも、初見で挑む入試試験などの長文問題は、内容のジャンルは教科書と多少一致するかもしれないが、教科書の本文と入試の本文が全く一緒ということはまずあり得ない。生徒達は自らの既存の知識を頼りにその場で理解しなくてはならないのだ。また、Yes/Noの質問だけでなく、HowやWhyなど、自らの意思を問われる場面もある。そう考えると、教科書を用いながらも、どうやって即時対応することができる力を育てるべきなのか。私は、この課題に対し、生徒が考える対象物である教科書のストーリーをしっかりと理解した上で、意見を問い、そして習得すべき表現を自らの表現で活用させることが必要だと感じる。

私が実習先で担当させていただいた箇所、NEW HORIZON 3のUnit3を例に考えてみよう。この単元ではフェアトレードが題材として取り上げられていた。導入として、第一次は教科書内容と共に興味・関心を深めるためにガーナの紹介から始まり、フェアトレードとは何か説明した。次に、展開として第二次では実際にフェアトレード商品を持参し、自分たちの近くに存在することを伝えた。他、この商品を買うことで南の国で働く人にどのような影響があるか生徒と復習しながら、教科書の内容の理解に努めた。そして、第三次ではガーナで働く子ども達の苦労やフェアトレードの役割の大きさについて書かれており、世界の貧困の現実を生徒たちは知った。最後の第四次ではガーナの少女から手紙が届いた場面でのこの課の結末となっている。この題材でどのように自ら応用する力を育てるべきだろうか。賛否両論もあると思われるが、私は生徒に考えさせる力をつける場面として適している時間は知識を習得した第三次以降と考えている。なぜなら、意見や意思を問う場合、それに対する対象物をまずはしっかりと理解しておくべきだからである。そこで私は第四次に『フェアトレードを買いますか。そしてそれはなぜですか。』『子ども全員が学校



に行ける国はどんな国だと思いますか。』と定まった答えのない自らの意見を尋ねる設問をワークシートに用いた。すると、ほぼ全員が自らの意見を書くことができた。英文を書くことは難しいかもしれない、と思い日本語でも可としたところ、英語で書くことができた生徒は半数程度だったが、自分の意見を英語で表現する第一歩になっていると感じた。第一次を導入とし、二次～三次を展開とし知識を養わせ、四次で考える力を使わせる。各々のページのストーリーを繋ぎながら一貫性を保つことで、意見の対象物をしっかりと作りあげていくことが必要である。また、教科書内容の把握と同様、単語や文法の習得も必須である。文法ターゲットは継続・経験・完了を表す現在完了形であった。そこで自ら応用する力を育てるべく、選択肢を用いた英作の他に、選択肢のない英作も用いた。第三次では経験用法の否定である、“～に行ったことがない”(have never been to～)の習得がメインであった。そこで、“～に行ったことがない、けれどいつかそこに行きたい。”(～, but I want to go there someday.)と設問を作り、前文を考えさせる問題を使った。シンプルで分かり易い、かつ一つ条件を加えることで、ターゲットセンテンスを作らせることはもちろん、自分で考えさせる“表現する力”を育てることができる。

このように、単語や文法をしっかりと固め、考える対象物について理解した上で自らの表現する力を付け、解答させる。生徒にとって着実な段階的アプローチは必要である。特にストーリーが設定された教科書では、しっかりと1つずつ順番に学ばないと生徒は混乱してしまうのである。そして、考えるターゲットを定めていく。こうすることでコミュニケーションに対する積極性や自ら応用する力も養われるのではないだろうか。

### 3. 授業外でも信頼関係を築くこと

コミュニケーション能力を育てることが重要視されている現在の教育方針で、教師は生徒たちに「英語を話すチャンス」を全員に、そして平等に与えなければならない。そこで、教育現場において教室の雰囲気というのは発言しやすい環境づくりの大きな鍵を握る。どのようにして良い雰囲気を形成すべきだろうか。教室の良い雰囲気づくりのために出来ることとして、様々な方法があるが、教師と生徒が厚い信頼関係を築くことが先決である。

そもそも教科授業において、先に教師が、疑問を投げかけ、絡まった学習内容を分かり易く解いていき、生徒がインプット、インテイク、そしてアウトプットするという形式が一般的だろう。そのアウトプット時で生徒主体になることで、学んだ言語の習得になる。逆に述べると、ここで生徒主体にならないとコミュニケーションは生まれない。英語を普段話さない生徒達にとって、積極的に発言することは簡単ではなく、むしろ少し勇気が必要とされる行動とみなされているだろう。3年3組では、指名しなくても、間違いを恐れず自信を持って発言できる生徒はクラスで2～3人程度で、設問に対して視線が一瞬合っても発言しない生徒がほとんどだった。なぜ生徒たちは発言をしないのだろうか。推測できる発言をしない生徒たちの心境として、発言行為に対する羞恥心、間違えることに対する抵抗・恐怖心、そして静かな教室の中で発声する緊張感を持っているだろう。このような心情から「考えは合っているかもしれないけれど、言えない。」という英語を話すチャンスも、「わからないけれど、なんて聞けば良いのだろう。」質問する機会さえも逃しているのである。答えとして、生徒たちは発言しないのではなく、できないのである。こういった問題を解決するためには、信頼関係を作ることが大前提ではないだろうか。実際、生徒は嫌いな先生の授業は好きになれず、結果その教科嫌いや苦手に直結してしまう。教科が嫌いだと、学ぶ意欲が欠如し、発言する気にもなくなってしまう。実習生であった私は、短い期間の中で信頼関係を築かなければならなかった。昼食時はお弁当班に混ぜていただき、教室掃除に参加するなど、英語科の授業以外にこそできるだけ生徒と関わりを持つことに努めた。そうすることで、初めは教室に知らない女性がいる違和感からか、目も合わせず、緊張していた生徒たちが、自然と名前を呼んでくれて話しかけてくれるようになった。しかし、ただ馴れ馴れしく近づきただけでは生徒との信頼関係は結ばれない。生徒それぞれが異なった距離感を持っている。私は担当教諭からそのことを指導していただき、体育館への移動中や、掃除の後に手を洗いに行くときなど、ふとした何気ない時には普段会話が少ない静かな生徒と会話をした。そうすると、成績優秀だが、普段自ら発言しなかった静かな女子生徒が、単語ゲームで誰もわからない問題で、堂々と手を挙げて発言したのである。発した英語は短い語彙だったが、彼女が発言したことは私と担当教諭にとって感動的瞬間だった。また、連日ウォームアップのクイズでも名答を連発し、生徒日誌には「英語の授業が楽しい。」と書いてくれた。関わりを持っていなければ、彼女は答えを知ったままで授業が終わっていたかもしれない。

コミュニケーションする機会は、生徒全員に平等に与えられなければならない。明るい元気な生徒、静かで穏やかな生徒にも同様である。難しい答えの場合、優秀な生徒に、また疲れが見られる時間帯は、明るい生徒に答えを求めたくなる。授業がスムーズに進むからだ。しかし、私はこの行為はご法度だと感じる。全員に英語を知ってもらいたい、と熱意があるなら、それは生徒全員に熱意ある指導が必要だろう。そして、その熱意は信頼が無ければ決して生徒には伝わらないのではないだろうか。

### 4. 動機付けのウォーミングアップ

教育実習は定期テストと実力テスト(1年生からの復習を兼ね、入試対策として位置付けられている試験)の返却から始まった。高得点を獲得した生徒には笑顔が見えたが、憂鬱な顔をし、「英語なんか嫌い。」とつぶやく生徒が多数いた。そこで私が机間

巡視し、気づいたことは英語科の点数が低いことより、長文問題にブランクが非常に多いことだった。分かるところだけ書けば、部分点をもらえることがある、と助言したが、生徒は、「わからない問題はもう手を付けられない。」という意見がほとんどであった。また、「英語は“捨て駒”だ。」と最初から諦念する生徒も。英語の試験において、長文問題は試験の後半にあたり、読解力や文法力以前に、長文のストーリーを理解するにおいて単語力が大きく問われる。主語や動詞が分かっても、単語が分からず、分からなければ「ただの字の羅列だ！」と諦めてしまうこと生徒が多い。また英語科においてよく言われる特徴が“積み重ね”の科目であること。一度躓くと、取り組む意欲が欠如してしまう。単語が分からず、やる気が無くなってしまう生徒のために、私はウォーミングアップが動機づけの最大の武器だと感じた。

子どもは頭を使うゲームが好きだ。それは生徒も児童にも通用すると思っている。1年生の授業も担当させてもらったが、低学年では体や声を使うゲームが好まれた。一方3年生の授業では、体を使うより、やや複雑で、謎解きのようなゲームの方が生徒たちもいきいきして取り組んでいた。私は上記で述べたテスト返しの様子から、単語を覚えることが苦手の生徒が多いと推測し、単語力を強化するウォーミングアップを行うことにした。そこで3学年の生徒の心をつかむことができたウォーミングアップが guessing game、いわゆる単語を当てるゲームだった。単語ゲームで有名な hangman とほぼ同じだが、解答の回数制限を無くし、倫理観から首を吊る絵を描かないようにした、少しオリジナルを加えたゲームである。私は授業初回にこのゲームを3年3組で行った。すると、生徒達は一旦ゲームの流れがわかると、どんどんと発言し、全員が黒板の方を向き、「なんだ？」という顔を見せながら、一生懸命答えを考えていたのである。このゲームの特徴としては、答えに world cup や soccer ball など話題性を持ったタイムリーな単語を選ぶと、苦手な生徒でも回答可能である。教科書で取り扱う単語を選ぶと、授業が展開しやすく、また、教科書で既出の重要な単語は復習にもなる。列対抗戦にすることで、より必死になり、何より楽しみながら単語を馴染ませることができる。他に人気の高かったウォーミングアップとして歌詞の書き取りも好評だった。世界中の若者から大人気の One Direction や Taylor Swift から有名な曲をいくつか選び、歌詞の単語の一部を空欄にした。1回目は日本語訳を見ずに聞き取りを行った。英語の速さから戸惑い、歌詞を追うことに必死になっていた。2回目は日本語訳と照らし合わせ、あてはまる英語を予想しながら聞き取らせた。するとヒントを知り、より答えに近づくことで集中力が一層増し、答え合わせ時、音楽を答えが流れた後に止めると、まるで早押しクイズのように答えが飛び交った。生徒が積極的に英語を発声する瞬間である。生徒の日記には曲のリクエストや歌の感想が多く見られ、関心の高さも窺えた、何人かの女子生徒は、書き取りに使った歌詞のプリントを休憩中に持ち歩き、笑顔で歌っていた。このような生徒の興味・関心は積極性を高めるためにウォーミングアップは必要不可欠ではないだろうか。

人間、無関心なことに積極的になることは非常に苦勞を伴う。特に勉強が嫌いな生徒にとっては椅子に長時間座り、将来の自分とは関係がないかもしれない分野まで勉強をすることは苦痛だ。しかし、教師は絶対に諦めさせてはいけない。また、授業は“終わりよければすべてよし”ではない。どんなにプロの選手でも、最高のパフォーマンスのために、準備体操やアップを怠らない。教師は始まりで生徒の心を掴まなければ、肝心であり核の展開部分では生徒を“つまらない”“英語が嫌いだ”と感じさせてしまう。ウォーミングアップで興味を持たせることは授業に参加させるための始めの第一歩になるのである。

## 5. 時間割に応じた学習

生徒が学校で教科を学ぶ時間は一日の授業や作業を時間区分に割りふられた時間割で決められている。時間割の原理・法則として、生徒たちは可能な限り偏りなくバランスのとれた授業を受けている。よって時に1限目に授業を受けるときもあれば、6限目の場合もある。そして、登校する平日の月曜日から金曜日まで授業を受ける。しかし、生徒たちは時によって集中力が全く持たず、授業が成り立たなくなる、または進度に影響が出てしまう場合がある。それによって時間割に応じた教育が必要である。集中力の差が出てしまう原因として、授業が行われる時間帯と、前の授業の影響が推測できる。最初に、授業が行われる時間帯について考えるために、1時間目と3時間目比べてみよう。まず、1時間目は朝一番なので、頭がまだすっきり冴えなく、眠いと感じている生徒もいる。しかし、3時間目は、あらかじめ1,2時間目で頭を使ったため、勉強に取り掛かる生徒が増える。また、月曜日と金曜日比べてみると大きな違いが出る。月曜日は久しぶりにクラスみんなと顔を合わせるため、やや緊張感がある。加えて、休み明けということで学校を面倒に感じることもある。それに比べて金曜日は、クラスで4日間過ごしたため、月曜日よりクラスのまとまりができる。時間帯によって生徒の学ぶ姿勢やクラスの協調性・共同性に大きな違いがある。次に前の授業の影響を考えてみよう。前の授業が、例えば体育でプールだった場合、生徒は次の授業に睡魔に襲われることがある。体を動かした疲労から、眠くなり、授業に集中できなくなってしまうのである。また、3学年のクラスの中では、家庭科で駒づくりを行った後の授業を見学させてもらったとき、生徒の一部は科目が変わったにも関わらず駒を手離さなかった。前の授業から切り替えができず、駒に夢中で授業に集中できなくなってしまうのだ。これらの問題点を考慮し、どのような効果的な授業ができるだろうか。これらの対策としては、生徒の状態に応じたアクティビティを考える。例えば、一時間目では、ウォーミングアップでは、音楽の聞き取りより、頭脳を使う単語しりとりのようなゲームの洋楽を使う方が生徒たちはすっきりとして次の展開に取り掛かることができる。生徒

が音楽の速さについていけない時があるのである。また、金曜日の後半の時間割では、班活動が非常に効果的である。上記にも述べたように週末になると、生徒達は週末よりリラックスしており、生徒同士の会話も増える。例えば、他の班と競わせる形式にすれば、調子づき、アクティブに活動を行う。班で協力する形式にすれば、男女関係なく生徒同士は会話を交わし、仲良く活動に取り組む。また、前時間の授業に対する対策としては個人に学習させない、前説でも述べた他者と関わりを持たせる活動が有効だ。私は実習最終日に、授業が進んでいた3年3組で習った単語やフレーズを問題にしたボードゲームを教材として用意し、弁当班で行わせた。生徒達は、よく会話し、「この答え、何だっけ？」と、教科書を開き、積極的に英語を発していた。このような協同的な学びは、他者と組み合わせ、学習に参加させることで効果をさせることで、積極的に学習をさせることができるのである。

生徒たちは、子どもであり体力面だけでなく、忍耐力などの精神面もまだ十分でない。クラブ活動によって活動量も異なり、睡眠時間、勉強時間も生徒それぞれである。また人間関係や、家庭環境によってストレスを抱えている生徒も存在する。そんな子ども達が集まり、集団で授業が行われる学校だからこそ、生徒の状態を観察する必要がある。その状況に応じた適切な授業を行うことで、自ら学ぶ主体性が形成し始めるのである。

### III. おわりに ～教師はエンターテイナーである～

3週間の教育実習を経て、様々な課題に直面した。教科指導においては、教材研究をしっかりと行うこと、4技能をバランス良く組み合わせること、正しい発音で確かな知識を与えること、板書は見やすく授業の経過が分かるように収めること、褒める言葉や意欲向上に繋がる英語で多用すること、など基礎的なことは模擬授業でも経験し、事前に学習していたため、当然、用意周到で臨んだつもりである。しかし、現実とは理想とは全く違った。生徒指導に苦勞することは想定範囲内であったが、生徒が興味・関心を持ち、積極的に授業に取り組んでくれるようにするのは、一つの工夫だけでは到底できなかった。学校や生徒達の特徴・個性は様々であり、その様態は自分の想像とは大きく違ったのである。コミュニケーション活動が求められる今、どのようにすれば生徒が能動的学習として、積極的に取り組んでくれるだろう。その答えとして私は、教師は“教育のエンターテイナー”でなければならぬと感じる。生徒を楽しませ、時に惑わせ、引き付ける。プロのエンターテイナーは観客全員を魅力するのが流儀である。同様に、教育のプロである教師は英語の授業で生徒を引き付けるべきではないだろうか。私は将来そのような教師になって、生徒たち全員が目輝かせながら学びに取り組む姿を見たい。そして、英語が嫌いな生徒をゼロにすることは不可能ではないと信じている。そのためにも、能動的学習を活用し、生徒が積極的に学ぶ授業を作りたい。最後に、実習先的那智中学校の皆様へ感謝の意を表してその論文を締め括ることとする。

\*\*\*\*\*

## 教職実践演習 秋学期レポート

### 「教科内容等の指導力について」

平岡麗南

#### I. 教科指導とは

学校内での授業は生徒の学習する姿勢を育成していく場であり、教科指導は責任のある仕事のひとつだ。授業には塾に通う学力の高い生徒から勉強嫌いな生徒まで学力の差は大きく開いており、どちらも退屈させない授業が求められている。また、授業は担任をもつクラス以外でも関わりを持てる貴重な時間であり、きちんと教科指導ができれば教師としての信頼も高まる貴重な機会だ。逆に情熱がなく、教科指導がきちんとできない教師は生徒から「一人前」の教師として見られないだろう。

教科指導は学習指導要領や学校や学年の方針、生徒の現状などに基づいて計画される。近年ではグローバル化に伴い、学校での英語教育改革が求められている。英語教育改革実施計画では中学校でも基本的に英語で授業を行い、CEFR A1～A2程度とされる「身近な事柄を中心に、コミュニケーション図ることができる能力を養う」ことが目標とされている。私が中学生だった頃からは想像しがたい目標である。しかし時代の変化は教育方針にも影響するため、教師自身も常にアンテナを張って新たな指導法や授業の改善に積極的に取り組まなければならない。

#### II. 効果的な指導法とは

日本の英語科においてはその指導法についての研究が絶えず行われている。私は英語科教育法の授業を通してこれまでダイレクト・メソッド、オーラル・アプローチ、コンテンツベースド・アプローチなどいくつか指導法を学んできた。理論をよく理

解した上でこれらの指導法を組み合わせることでより効果的な授業ができるだろう。

### 1. 初級者向け

学習期間の短い英語は中学入学時点では国語や算数に比べて苦手意識を持つ生徒の割合がそれほど高くない。むしろこの入門期で苦手意識を強くさせてしまうと今後の英語学習に影響がでてしまう。「楽しい」「もっと知りたい」と生徒に思わせるため、入門期ではゲームや歌を通して活気のある授業にしたい。ただ遊ぶのではなく、ジャズ・チャンツやパターン・プラクティスを用いて生徒の発話量を増やしたり、ALT から生の英語を聞かせて耳をなれさせることが目的である。また ICT 教材を用いることで生徒の興味を引くだけでなく、より視覚的・聴覚的に効果的な指導もできる。生徒の興味と照らし合わせながら試行錯誤すればきっと生徒が楽しみながら授業を受けることができるだろう。

### 2. 中・上級者向け

一定の英語力が身につけば、「英語そのもの」を学ぶのではなく「英語を通して」特定のタスクを行うタスク-based Learning で英語力を向上させることがより効果的な指導法だと考える。ここでは母語話者のように習ったばかりの目標言語を使うことを目的としているのではなく、学習者がその時点で持ち合わせている中間言語を最大限に活用し、特定のタスクができることを目的としている。学習者自身が自分のできることを自由に試したり、積極的に間違いを犯したりすることで学習が進むという考え方に基づいているため、特定の表現の使用を指示・強制してはいけない。教育実習先の現場を見て、実際に公立の中学校に取り入れるのは難しそうと思ったが、Task-based Learning やイメージ教育は中・上級者の英語学習に非常に効果的だと思う。日本の教育現場では生徒が自ら考えて試して学習していくというより、訳読式でテスト対策的な授業の方が多く見受けられる。生徒たちがより積極的に学び、わかる面白さ、使える楽しさを実感するためにもこういった効果的な指導法を是非用いてみたいと思った。

## III. 教科指導の指導力とは

教科指導とはただ指導法を知っているだけでなく、それを授業の中に効果的に取り入れることができなければならない。ここでは教育実習を通して気づいた指導力について述べたい。

### 1. メリハリをつける

どの科目の授業においても寝てしまう生徒や私語に夢中になってしまう生徒がいる。教師として全員を授業に参加させる必要があり、そのためには明確な指示が必要である。教師は授業計画を立て、「今から〇〇をする」「次は〇〇をする」と順序立てているが、それは思いのほか生徒には伝わりにくい。その時々には明確な指示をし「何をやる時間なのか」を生徒にも認識させることでやっとまとまりがでてくる。例えば前を聞いて説明を聞かせるにしても教科書は開くのか、板書しながらなのか、生徒の焦点が集まるようにしなければならない。また板書やプリントは生徒が見てわかりやすいようにまとめる必要がある。授業計画においてどのように授業を組み立てるかということだけでなく、どのように指示をするか、またその指示を受けた生徒たちがどのように反応するかという導線まで考えなければならない。

基本的に座りっぱなしの 50 分間の授業は生徒の集中力を保つことが難しい。英語科の授業内では説明だけでなくアクティビティやタスクなどを取り入れることが多いため、生徒が退屈しないように工夫することが可能である。例えばペア・リーディングをする際に立たせたり、クラスメイトに質問をして回るアクティビティをさせたり、声を出すだけでなく体も動かさせさせることができる。また、時には少し雑談を入れたりしてブレイクをとることも効果的だと感じた。

### 2. コミュニケーション

授業を行うにあたって生徒のことを知っていて損をすることはない。発問や指摘をする時に名前がわからなければ無駄な時間がかかってしまうし、生徒のレベルがわかっているならば発問の難易度も変えてやることができる。生徒の回答を予測し、生徒が答えやすい発問方法をとることでその発問を有意義なものにすることができるのだ。

授業内では様々な生徒がいるが、「勉強ができたなら授業に参加しなくてもよい」「英語が苦手だから寝てもよい」「仲のよい生徒だから私語が多くてもよい」などと勝手な判断をせず、正しいことは正しい、間違っていることは間違っていると言える毅然とした態度をとる必要がある。教師が間違ったことをすると生徒からの信頼は得られず、信頼がなければ授業が成り立たない。だからといって偉そうに生徒と接するのではなく、生徒に歩み寄り、生徒のつぶやきに耳を傾けられる教諭が理想だ。一部の生徒が発するつぶやき（疑問）は他の生徒もひっかかっている部分であることが多く、その疑問を解決することでより理解が深まる。生徒のつまづきやすい点や興味のある事柄は授業改善に生かすことができるので、なるべくたくさんコミュニケーションをとりたい。